

第14期足立区社会教育委員会第5回定例会会議録

会 議 名	第14期足立区社会教育委員会第5回定例会会議録
開 催 年 月 日	平成27年7月7日(火)
開 催 場 所	足立区役所本庁舎 中央館4階 401会議室
開 催 時 間	14時00分開会～15時38分閉会
出 欠 状 況	委員現在数 3名 出席委員数 2名 欠席委員数 1名
出 席 者	千葉敬愛短期大学学長 明石 要一 氏 日本体育大学名誉教授 成田 國英 氏
事 務 局	足立区教育委員会教育長 定野 司 足立区教育委員会子ども家庭部長 伊藤 良久 教育委員会事務局 子ども家庭部 青少年課 管理調整係 出席職員 青少年課長 寺島 光大 青少年課管理調整係長 広瀬 弘紀 青少年課青少年教育担当係長 村上 長彦 青少年課青少年教育担当主査 福井 京子 青少年課管理調整係主事 芝戸 拓矢 青少年課管理調整係主事 渡辺 菜摘
会 議 次 第	別紙のとおり
会議に付した議題	1 今後の中心課題について 2 検討テーマについて

定刻午後 2 時・会議開会

司会:事務局寺島課長

社会教育委員会会議第 5 回定例会を開催いたします。松田委員は、本日所用のためご欠席でございます。では、定野教育長よりご挨拶を申し上げます。

定野教育長

本日、足立区と学芸大学との連携事業の協定締結のため、学芸大に行ってきました。区内小・中学校 1 校ないし 2 校に対し、大学の先生や学生が入って子どもたちをサポートする事業です。目的は、貧困対策の一環ですが、当区の非常に厳しい状況のなか新規プログラムをつくり、どのように広めていくことができるか、文科省の研究事業としての取り組みです。

プログラムは、3 年ないし 5 年のスパンで実施していく予定です。そこで申し上げたことは、地元の大学と連携するところに意味があることです。これとは別の大学連携ですが、先週は中学生、先々週は小学生を対象に大学連携事業を実施しました。

そこで子どもたちに、「また参加したい人」と質問するとたくさん手が上がります。意欲のある子どもや親は、本当にしっかり取り組んでいます。

問題は、出てこない、出られない子どもたちです。これについては、大学が学校へ出向き支援することは非常に意義あると考えています。意欲のない子どもや親に対する支援は喫緊の課題であり、貧困対策の一つとして捉えています。

昔は、貧困をばねに勉強して、「偉くなろう、家を持ちたい」などと思う子どもたちが多く存在しましたが、今は、「これでいい」と諦めの風潮が強いと、ある大学の先生がおっしゃっていました。

ある本では、高度成長期を知っている人間は、「いや、まだまだ頑張れる」と考えるが、今は「今日、明日食べていけばいい」というニートやフリーターが増えてきていると警鐘を鳴らしていました。正に、こうした大人にならない子どもたちを育てていく点では、非常に有意義な取り組みになるのではないかと期待しています。

先生方には、引き続き色々な角度で貧困を見ていただき、教育委員会、あるいは足立区の事業をどう進めていくべきか、更にご意見をいただきたいと存じます。

寺島青少年課長

次に、明石議長よろしく願いいたします。

明石議長

先日、日本教育新聞を読んでいましたら教育長のお話が載っていました。職員もぜひ読んでいただき、情報共有すべきです。「タコつぼ」に入ってしまうと情報は入りません。教育委員会内部から「タコつぼ」脱却を図りましょう。

教育長の記事は、大変興味深く読ませていただきました。先ほど教育長がおっしゃった

ように、昭和35年ぐらい、65年ほど前が日本の古き良き時代でした。

その1つは、当時の食育で申しますと、脂肪と炭水化物とたんぱく質がきれいに3等分取れた食生活がありました。昭和35年以降から脂肪とたんぱく質が増えて炭水化物が減り、40年代頃から洋風化してきました。青少年の食生活の検討も必要と思います。足立区の給食は注目されています。こうしたところも、さらに伸ばしていくべきです。

もう1つは、子どもの体力です。昭和39年東京オリンピックを契機に、昭和60年頃まで徐々に上がっていきました。ところが、昭和62年を境に低下してくる。このような大きなトレンドを見ますと、食と体力の問題が明らかと言えます。

昭和35年頃は、子どもたちの知力や体力、食生活のデータも正規分布で、富士山の形を描いていましたが今は「台形型」です。子どもたちの「台形型」を富士山の型の正規分布にするためには、どうすれば良いか。要するに、豊かさと貧困の二極化についての施策をどう展開していくべきか議論してください。よろしくお願いします。

寺島青少年課長

それでは明石議長、次第に沿いまして、よろしく願いいたします。

明石議長

前は貴重なデータをいただき非常に参考になりました。それを踏まえて、今日は方向性を明確にしていきたい。まず、事務局より本日の資料の説明をお願いします。

村上青少年教育担当係長

配付資料をご説明いたします。

本日の検討内容は、今後の中心課題として、2つのテーマについてご意見をいただき、まとめていきたいと考えております。その1つが、地域において生活体験を中心とした青少年の豊かな体験活動として、社会において生活力を身に付けることをテーマに取り上げて考えること。その際、足立区の特色として、地域の青少年団体が活発に活動していますので、地域団体をどのように巻き込み展開していくべきかがポイントです。

もう1つが、貧困の問題にも出てきますが、家庭の教育力、保護者の力をどのように高め、子どもたちの生活習慣や社会力を身に付けるか、そのベースとなる家庭環境をどのようにつくっていくかの2点です。

この2つをテーマとしてご議論いただき、それに合わせて様々な取り組みを、そこにベクトルを向けながら、どのように取り組んでいくかを考えていきたいと思っております。

今回、特に体験活動を大きなテーマとして捉え、地域でどのように場を提供するのか。青少年が体験活動を通してどのような内容で取り組めば、社会力とか生活力を身に付けられるのか。そして、今の子どもたちの状況を踏まえて望ましい活動、それを実施するために青少年団体をどのように位置付けて巻き込んでいくべきか、の3点を検討できればと思っております。

これに関して、先生方の豊富な体験や知識からの事例や足立区の様々なデータ見ていただいた中での取り組み提案、ご意見などいただきながら、まとめていきたいと考えております。

今回は、家庭の教育力をテーマに行いたいと思います。あわせて、それに係る資料として幾つか用意いたしました。特に体験に関わる青少年課の具体的な事業の資料を用意させていただきました。

1枚目は、青少年課の所管事務概要です。青少年課、各係がどのような事務を行なっているか記載しています。

青少年事業係は、子ども会を中心とした体験活動、ギャラクシティ支援担当は、ギャラクシティの支援として、指定管理者が実施する様々な体験事業をサポートしています。青少年教育担当は、先行的事業として、青少年の居場所や子どもの安全・安心のための体験活動の場を提供しています。そして、体験活動推進担当は、区内の大学などで、小・中学生の体験事業に取り組んでいます。

それぞれの資料は、従前のものです。青少年教育担当の中・高校生の居場所づくりや大学生の活動支援、子どもの安全・安心プロジェクト関連の事業をまとめました。

中・高校生の居場所に関しては、放課後子ども教室を立ち上げたときから青少年課が担当していますが模索状態といったところです。現在は、チラシなどで呼びかけ、区内の幾つかの会場におきまして中・高校生の居場所づくりを実施しています。運営は、主に地域のボランティアが関わっており、中・高校生の放課後の場の提供として、大人との交流、あるいは同世代の交流の場となっています。

大学生に関しては、自分の発想で色々なイベントを実施しています。東京未来大学の学生を中心に、子どもたちの話し相手になるような取り組みを行なっています。

次に、子どもの安全・安心プロジェクトについてです。子どもの安全を守るためには子ども自身が自分の身を守る必要がある、との考えに基づきプロジェクトを組みました。その中で、子どもに関わる団体によって劇団を結成し、小・中学校や子ども会で、自分の身を守る力をつけていくことについて実践しています。

また、27年度、小中学生のジュニアリーダー研修会、キャンプ実施の資料を添付しています。体験活動は、予算的にも含めた資料になっています。帝京科学大学との連携事業では、ふれあい動物教室を小学校の体育館で年間15回、「大学遠足」は、上野原市にある帝京科学大学に7校の小学4年生が訪問して、現地で飼っている動物などとの触れ合い体験。さらに、「一日大学生」は、中学生、小学生ともに年2回、大学での授業体験事業を行っています。

東京電機大学とは、科学・ものづくり体験教室、東京芸術大学とは、音楽教育支援活動を約50校の小・中学校やこども園に出張してコンサート、あるいは教員研修などを実施しています。

また、百人一首、将棋といった日本文化に親しむ事業、ギャラクシティでは、6、7月、夏休みに向けた体験事業として、学校を通して子どもたちに向けたチラシを配布しPRしています。こうした事業への子どもたちの参加は、保護者次第といった傾向にあると言ってよろしいかと思います。最近のギャラクシティの来場者は、6、7割が区外です。東京近

郊、都内、埼玉、千葉などの子どもたちの活動にもなっています。

そして、前回お話が出ていました総合型地域クラブのパンフレットも用意しました。現在区内に9つの総合型地域クラブが創設されています。子どもから高齢者まで運動だけではなく文化活動も含めた様々な体験活動の場として、地域の皆さんのご尽力により運営されています。

資料の説明は以上ですが、色々と議論いただく中でご質問、ご意見などいただければと思っております。

明石議長

ありがとうございました。大変多くの事業を実施しているようですが、それぞれの事業のつながり、接続をどうしていくのかと思いました。

本日は、これを踏まえて貧困対策としても一つ方向性を出したいと思います。事業をたくさんやっても、直接的な貧困対策にはならないと思います。思い切って、シャッフルしていくぐらい大胆な発想が必要なのではないでしょうか。

成田副議長

今後の社会教育を進めていく上では、小・中・高校生の居場所対策は色々あるでしょうが、ケース・バイ・ケースと申しますか、これをどうすべきか、という視点からさらに広げた考えをしていくべきだと思います。議論が逸れるかもしれませんが、今、世界全体がグローバル化に向けて変わろうとしています。

ある区の出版物でも、グローバル化という言葉を使っています。つまり、200を超す世界の国々の中、国境を隔てている現状、これを「解体」して、日本の子どもたちの将来をどのように導いていくべきか。

グローバル化という時代を迎えて、足立区の子どもは、足立区をどのように支え、どこに向けていくべきか。この視点に立った区民へのアピールが必要と思います。

その上で明石先生が言われた幾つかの試みが、点と点では無く、どのようにお互いに結びついていくのか、結びついているのか、その辺を少し整理してみると、これとこれは残し、これは改善しよう、などの考えが出てくると思います。

明石議長

私も一つ提案があります。足立区発の「青少年体験推進条例」を制定したらどうか。個人に任せれば、先ほど教育長がおっしゃったようにあらゆる面で階層化、二極化が進むと思います。

例えば、静岡県が議会として、「山坂達者化運動」をやろうとしている。鹿児島島の薩摩が明治維新をおこして。戦後非常に県民の体力が衰えたことの対策として、山に登って坂を下って元気になろう、達者化しようという「達者化運動」を起こしました。明治維新でも薩摩隼人はそれで鍛えていた。

ですから、足立区版「体験推進条例」で子どもたちを元気にする。例えば、熊本の阿蘇市は「体験推進条例」をつくっています。すなわち、子どもたちは1週間体験する権利が

あります。「体験推進条例」の場合、1つは、体験バウチャーのチケットを配布します。チケットは、0歳から18歳の間に使えます。保育所の場合は色々体験しますが、土・日も使えるなど限定した体験バウチャー、足立バージョンとして出していく。

例えば、大学連携事業に参加する人は良いのですが、参加しない人を何とかしていく。そういう視点の条例です。

是非、内部で検討していただき、特に教育委員会で挙げてほしいのは、それぞれのステージでの体験です。例えば、3～5歳児の3年間は、仲の良いお母さん同士が1週間子どもを交換するホームステイです。今の保育では、お泊まり保育がありますが、ホームステイもやっていただきたい。昔は親戚の家に泊まりに行く機会がありましたが、今は少なくなりました。せめて仲のいいお母さん同士が1週間子どもを交換して生活をともにする。幼児期のこうした経験は、子どもを立派に育てるきっかけになります。小学校1、2年生では、体育館で夏休みにお泊まり体験をする。これには、文科省が補助金出しています。

4年前の大震災でも多くの方々が体育館で生活しました。ストレスたまることも踏まえて、小学校の1～3年生頃に1泊～2泊体育館で寝るような体験を提供する。3、4年生には、秘密基地づくりなど子どもの発達に合わせた体験を用意してあげる。

中学生は、1カ月間の全寮制を体験させる。高校生にはボランティア活動の提供。このように、各ステージをイメージした体験バウチャーを実践してもらおう。

これをまずインプットして、次、アウトプット、アウトカムがあります。やはり、足立区はビッグデータつくってほしいと思います。ビッグデータをつくることによって、その体験条例がどれだけ効果を持つか。色々な体力測定から学力のデータ、病気、けがの状態、色々なデータを管理していきます。

荒川区では、ベネッセと組んで小学1年生から9年間、ずっとナンバーをつけて、1年1年のデータを追っています。いつ算数嫌いが出てきたとか、体育で1等になったとか、不登校になったとか、それを担任が見て2年間受け持つ。その後のヒストリーもある。要するに病院のカルテのようなものです。足立区の子ども一人一人を理解しながら、どのように手を打つか、こういうことをデータとして押さえていくべきです。

個人個人の把握とトータル的にいつからよくなってきたのか。不登校問題、高校の退学問題なども含めて行政の評価指標としていく。このようなスキームを考えていただきたいと思いました。全ての子どもたちがスマートフォンからも検索できるように。

成田副議長

仲の良いお母さん同士の子どもの交換ホームステイについて、具体的に伺いたい。

余計な心配かもしれませんが、お隣の奥さんとうまくいっていないこともあったり、その辺はどのようにお考えですか。

明石議長

仲のいいお母さん同士はいます。仲のいいお母さん同士であれば、隣のお子さんを預かってもいいと思います。預かることによる一石二鳥、1つは他人の生活を味わうことができる、1つは疑似親戚を増やしてほしいと思います。

成田副議長

それに加わらないお母さんが出ても構わないのですか。

明石議長

構いません。それは家庭教育だから強制はできません。保育所とか幼稚園のお泊まり保育は一斉でやってそれをまず最低実施する。それだけでは乏しいので、親戚なども含めて1つのプライベートとして、それも体験していくべきと考えています。

今、従兄弟が少なくなりました。私の講演でも申し上げますが、私や成田先生の世代は従兄弟が30人いることもあります。今の子どもたちの中には、親戚がない子も増えてきています。それで新しい親戚、疑似親族をつくっていくことも、地域づくりにつながるのではないのでしょうか。

明石議長

かつては、従兄弟会がありました。盆と正月です。

従兄弟は、いざという時に助けになってくれます。そういうセーフティネットは、行政だけに頼るとするのは困ります。また、行政はサポートしてくれますが、行政も「体力」をつけておく必要があります。

定野教育長

確かに他人の家に入る経験は、今の子どもたちは少ないと思います。

村上青少年教育担当係長

明石先生の先ほどのお話で、お泊まりの時、Aという家庭の子どもとBという家庭の子どもでは、Bの子がAのところに行ったとき、Aの子とは一緒ですか。

明石議長

それは別々です。交換と考えました。

村上青少年教育担当係長

それがお母さん同士ではなくても、例えば、子ども会など、地域で色々な活動をしている方同士、子どもは大きくなったので、近所の子どもを預かるなども考えられます。

明石議長

「短期里親制度」ですね。

定野教育長

子どものとき親に怒られ、帰ってくるな、と家に入れてくれない話がありました。すると、近所のおばさんのところへ行って、おなか減ったからご飯を食べている。親は心配して、あそこだなとわかっているんですが、すいませんと後ほど引き取りに行くという、昔はそんな感じでした。

明石議長

それは、足立区や江東区、葛飾区など下町でできやすいと思います。

伊藤子ども家庭部長

色々な効果がありそうです。他人と折り合いをつけながら生活してみる、親だったら許してくれたりしますが、他人に自分がしたいことを表現し、それから怒られもし、他人との関係が出てきて、たくましさも身に付く。

成田副議長

幼児や小学生を持つ家庭で、共働きの家庭のデータはありますか。

村上青少年教育担当係長

あります。

明石議長

私は、小学校低学年と高学年の交換ホームステイは必要だと思います。低学年では、「おばちゃん、お手伝いしましょう」とか、ご飯食べたらず家ではやらない茶わんを運ぶ。お利口さんに。

5、6年生は「通学合宿」と言って、17、18人自分たちで1週間生活する。時にけんかもします。洗濯機1台をどうやって使うとか、誰が掃除する、風呂を沸かすかとか。そういう皆で考えることが大事です。

例えば、公民館での合宿の場合は、近所にもらい湯に行きます。5年生の2人がインターホンを押したら、「だめ」と断られます。次の日にもインターホンを押し、今度は、しっかり自己紹介して公民館で通学合宿していることを伝えます。そして、お風呂お借りできますか。「ああ、いいよ」となります。

おばちゃんからも子どもたちに質問します。名前や兄弟のこと。おばちゃんと子どもたちは仲良くなる。一宿一飯、これに挑戦させる。断られる世間の冷たさも学ぶ。工夫次第で様々な体験バリエーションを与えることで生きる力、生活力が身に着くと考えます。

伊藤子ども家庭部長

多様な文化を認めることにもつながると思います。現在は、自分の家庭のルールの中で生活しています。他の家へ行き違うルールを体感してみる。食事の味付けから全て違うわけです。我慢して食べなければならない時もあります。その中で生きていくこと、多様性の中で寛容性が身に付いていくと思います。

定野教育長

家だとわがままが言えますが、人の家へ行くとちゃんと食べる。今の居場所づくり事業は、何でも揃えて、「いらっしやい」ではなく、先生のお話は、「自分で見つけてこい」ということも必要とおっしゃっていると思います。足立区が考える事業は、何でもセット

して与える傾向にあります。それだけではやはり良くないと思いました。

伊藤子ども家庭部長

今までと違う体験も必要ということです。やり方は色々あると思いますが、預け合いでもいいだろうし、親から離れて他人の飯を食うということですね。

定野教育長

震災のときに小学生を寝泊まりさせたことがあります。当然親も一緒です。子どもたちだけで多くの体験をさせることは、非常に効果的だと思います。

明石議長

足立区の子どもたちは、学校などにみんなで泊まって色々と体験するという事はないのでは。

定野教育長

現在はございません。

明石議長

やはり、それではストレスがたまります。一度は「通学合宿」を経験しておくべきです。

伊藤子ども家庭部長

1泊的なものではなく、1週間などまとまった経験がいいです。

明石議長

寝袋体験は生活力がつきます。学校を指定してトライアルでやってもらっては。

定野教育長

先ほど阿蘇市のお話がありましたが、阿蘇市ではそのような体験をやっているのですか。

明石議長

1週間の体験をやっています。よく成人式で歌う市長がいますがその市です。

定野教育長

市長がおもしろい方で、成人式で歌っていらっしゃいますね。

明石議長

私が提案させていただきました。そこには、文科省の国立青少年交流の家がありますが、そこを使っています。対象は中学生です。

伊藤子ども家庭部長

足立区でやる場合は、やり方はあだちバージョンですね。全区一斉にやらなくてもいいと思います。

明石議長

次に居場所の問題です。杉並区では、「ゆう杉並」があります。青年のユースの「ユ一」と遊ぶ「遊」で「ゆう杉並」。これは中・高校生が中心となって毎日200人ぐらい来ています。

1人の専門職が柔軟に育てるといふ、自分たちでルールを決めてやっています。これは厚労省も推薦し、児童館の上の年齢層が活動するスペースが欲しかったという杉並では言っています。

私は民間の居場所づくりを推奨してほしいと考えています。例えば駄菓子屋文化があります。今、駄菓子屋はかなり減っていますが、世田谷区に「駄菓子屋たかさん」という店があります。その駄菓子屋はツケがきく。ノートに記録し月決めで支払います。客は、小学生から高校生まで来ます。ノートの記録は、ベテランの高校生のお姉さんが管理しています。計算が合わないとお店のお母さんが叱る。軽四トラックでも週1回、公園で駄菓子売ります。昔あった紙芝居のようなものです。

例えば、そういうことをやりませんか、コンテをつくってコンテストやってもいい。居場所を公で全て用意することは難しい。NPOに居場所をやってもらうことも考えられます。

次に私がお願いしていることは、ある「シャッター商店街」があります。そこに小学生が働きに行く。豆腐屋、魚屋と交渉してほしいです。

「おじちゃん、俺使ってください」と。俺の時間給は100円です、と交渉して。100円も払えないよ、とか。まずは自分の賃金交渉です。子どもが1人働けば、大人4人は引っ張ってきます。お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん4人です。

そこで現金を出して商売となれば児童福祉法に違反しますから、校長先生と商店街の会長さんが地域券を配って、ラジオ体操のように券に判を押して、その分を小学校に寄附する、そのお金の使いみちを児童会で審議する、学校は必要に応じて活用するシステムにすれば児童福祉法に違反しません。まさに一石三鳥ぐらいになるというか、そういう事業を地域ぐるみで意図的に行うのです。

子どもたちの介入によって、自分たちで稼いだ金を貧困国に寄附してもいいし、そういう自治能力も培っていくべきです。そこは成田先生がご専門です。

成田副議長

今、先生のお話は都会、あるいは農村の例ですか。実際にやっているところは。

明石議長

両方です。シャッター商店街は。実際に実践しているところはありません。それを足立区では是非やっていただけないか。

成田副議長

足立区でやるとしたら、試みとして地区を限定していくべきでしょうね。

定野教育長

シャッター通りといっても、お店がやっていなければなりません。

成田副議長

やるとなれば、よく周知して学校や保護者、商店街などに良く理解していただいた上で、ある地域で試験的にやってみる。こんな取り組みでしょうか。

定野教育長

シャッター通りと象徴的におっしゃいましたが、しっかりした店でないと働くことはできません。そういう店は、非常に限られています。

明石議長

4～6年生を対象に、やはり交渉して時間給を決めてほしい。お駄賃じゃないけど、俺の労働力は何円かと、1年間、または10回経験するとベースアップするとか。

成田副議長

そういう試みをしながらも、どういう視点から評価していったらいいかだと思います。それも新しいこれからの課題かもしれません。

定野教育長

今、インターンシップで中学生は企業に行きますが、小学生は見学ぐらいです。自分が仕事を手伝うところまではいっていません。

伊藤子ども家庭部長

仕事体験は、コミュニケーション能力や交渉力も身に付くと思います。

定野教育長

「いらっしやませ」のあいさつからですね。

明石議長

三重県の高校生レストランの話ですが、高校生の地域参加です。1万5,000人の町で、高校1校しかありません。多気町という町ですが、教育委員会の社教主事と食物科の先生と話し合って高校生のレストランをつくることになりました。レストランは、土日にかきます。レストランの設計、デザインは、三重県の工業高校の建築科です。今では門前市をなすように土日は人が集まってくる。それで有名な学校になり、テレビでも取り上げられました。

足立区の高校は9つ。このようなことにチャレンジする元気づけが必要です。教育長がおっしゃったように、退学者が減らない、希望が持てない、など負の連鎖が続く対策としては、小、中、高校生の一体的な取り組みが必要と強く感じています。

伊藤子ども家庭部長

青少年団体だけでなく、商店街をパートナーとして考えないといけない。子どもたちに学校、家庭以外の空気を吸わせる、この体験が大きな成長に役立つと考えます。

明石議長

キーワードは、第三の大人と出会おうということです。キャッチコピーで、第一は両親、第二は学校の先生。今の小・中学生は親と教師とはすごく接触している。第三の大人とほとんど会ってない。本日のテーマとして、体験活動の場の提供は、第三の大人との出会いをできるだけ多くする、ということです。

定野教育長

昔は、子どもに「何になりたい」と聞くと、純粋にスポーツ選手が多かった。今は年齢が上がると、Jリーグに入っても金稼げない、という声もあり、そこで夢が壊れてしまいます。学校の先生、保育士は言えるが、あとは、職業を知らないので出てこない。ですから、色々なものを見せることや体験させるべきと思います。

明石議長

今のお話と関連しますが、千葉県の中学生に聞きました。「千葉大知っていますか」と言うと、98%ぐらい知っている。千葉大に学部は9個あります。幾つ知っているか聞くと、教育学部と医学部しか挙がってこない。自分が見た先生を養成している教育学部と、病気にかかる医学部は知っている。あと知らない。ですから学部や職業を知らない子が大変多いのが現状です。

伊藤子ども家庭部長

そういった子どもたちの経験が、人生の選択肢の幅をどんどん広げていくと思います。逆に経験をしないと選択肢が広がっていかないということです。

定野教育長

例えば、生活保護を受けて親子に負の連鎖があるとすれば、それを断ち切る必要があると思います。

村上青少年教育担当係長

仕事をしている親の姿を見ていない子が多いと思います。

定野教育長

体験は、本当に色々な意味で重要です。

伊藤子ども家庭部長

家庭でできなくなったことが多く、それに対する仕掛けづくりが必要です。家庭の中でも色々体験ができることを広くPRし、身近にきっかけづくりをしていく方向性でしょうか。

定野教育長

そこで問題なのが、「やりたい人」は、大体手があがります。やりたくない子をどうやって引っ張り出すか、そこがポイントです。親も一緒に小学生についてくるわけですから、親の理解があって、子どももやる気がある、というところが大事です。それをどうやって気持ちを上げてやるか、そこが重要です。さきほどのバウチャーというのも、お得ですよ、のようなことが出てくると思います。

明石議長

何回施設に来たか、Suicaみたいにデータで確認できるもの、また、その公民館に行ったとき、何回体験したかというカードがあれば、1学期に1回、親と教師の3者面談で、「お宅のお子さん、あまりバウチャー使っていませんね」とか、「第三者の課題」はこうしましょう、など、このような形で体験を勧めることはいかがでしょうか。

定野教育長

単発では、ポイントやスタンプはありますが、トータル的なものは無いです。

明石議長

そういうビッグデータを含めて、スキームをつくるべきです。断片的ではもったいない。学力だけでなく、体力も含めて検討すべきです。

定野教育長

そのとおりです。足立区の親や子どもたちにとって体験がポイントです。

明石議長

是非、若い人たちの考え、センスで検討してみてください。

伊藤子ども家庭部長

行政は窓口に色々なデータを持っていますが、それを横につないでいないのが非常に大きな問題で、子どもの委員会でも課題になりました。

衛生部で持っている健康情報のデータからも、貧困の問題が発見できるはずだと考えました。しかし、個人情報保護の問題があり横のつながりが難しい。

先生がおっしゃったように、ビッグデータで個人に対する様々な情報を1つにまとめて、チェックできれば、支援しやすいと思います。

定野教育長

マイナンバーのようなシステムを利用できないか。

この間、小・中の連携会議がありました。都立高校9校の全校長に出席いただき、中学の校長と意見交換しました。多いところだと全体の8割が足立区の中学生です。

足立区の子どもたちはあまり外に出たがらない。経済的な問題もあると思います。

また、1クラス生徒が退学してしまうような高校もあれば、中途退学者がいないところもあり非常に偏っています。

95%は高校へ入りますが、ミスマッチ、不本意入学という言葉があるように、こんなはずじゃなかったと、考える学生も多いようです。「入れば（入学）終わり」、を何とか無くす、ということは意見が一致しました。そこで、今後は、小・中学と高校の情報交換ができないか、都立と区立の違いはありますが、それを含めて検討していきたいと思っています。

明石議長

この前の会議でも、不登校の全寮制の事例を申し上げましたが、青少年の放課後の居場所という視点で学校教育の延長ではなく、居場所として農作業教育の労働や物づくりの体験をすることによる達成感が重要です。

ややもすると不登校は学校教育の延長という考え方があります。やはり、体験不足が根にあるので、そこで動物を飼うとか、そこには不登校の高校生も行っていますが小中学生も通える、何か体験できる場として、是非、不登校対策として検討いただきたい。

成田副議長

世田谷区は各地に出張所があります。足立区もありますが、出張所と区民とのつながりを密にしようと努めています。

定野教育長

世田谷区では、支所と呼んでいます。足立区では区民事務所です。そこで住民票や戸籍謄本が取れますが、そのほかに地域の核になって区と地域との連携、調整も区民事務所が窓口となっています。現在、区民事務所の機能について、地域の窓口の特化していく議論も行っています。

伊藤子ども家庭部長

区民事務所では地域担当係長が配置されています。町会や青少年対策地区委員会など、地域の各種団体と関係を持って事務局的な役割を担っています。区民事務所でも、各種団体の情報が共有化されていない課題があります。

村上青少年教育担当係長

地区対も青少年課で取りまとめしていますが、区民事務所の担当係長がどのように調整しているか情報を集めていません。年間の事業報告や会計報告はあっても、直接の声を集めていません。

伊藤子ども家庭部長

ルーチン的に事業をこなすだけで、はっきりした目的意識が地区段階ではないのではないか。第三の大人と出会うような仕組みをつくらうとか、そのような政策的な意図を持って地域の中で動いている方は、数少ないと思います。

成田副議長

例えば、世田谷区の場合、出張所の2階は、日曜日や平日の夕方から夜にかけて開放して、太鼓の練習とか色々活動しています。足立区ではどうですか。

定野教育長

足立区は、住区センターにそのような機能を持たせています。区民事務所にも会議室とありますが、音楽や囲碁、将棋などの活動は住区センターです。住区センターは、現在49カ所です。区民事務所の17よりも多いです。

明石議長

いわゆる公民館的なものですね。

成田副議長

足立区内にあるのですか。

定野教育長

区内に49施設あります。地元が運営していますので非常に活性化していると思います。

明石議長

少しお聞きしたいのは、中央教育審議会で議論しているコミュニティスクールについてです。それと学校支援地域本部、放課後子ども教室です。世田谷区の場合が一番わかりやすいと思います。コミュニティスクールや地域本部、新BOP事業（Base OF Playing）で遊びの基地づくりなどがあります。全て学校を使用しています。

コミュニティスクールは教育委員会の主導、地域本部は生涯学習の主導、放課後子どもプランは厚労省、文科省が行っていますが、この3つを一緒にした体験ということを考えていけないといけません。足立区の場合、そこを考えていくと、この会議資料3-③の地域の青少年団体や組織の活性化というのを考える場合、実際そこは機能していると思います。それはそれぞれ所管が違うから勝手にしなさい、ではいけないので、もう一度体験という子どもの視点から捉え直すとこれはどうなってくるのか。足立も放課後子ども教室

は週2回ですか。

村上青少年教育担当係長

多いところは週に5日です。

明石議長

そこに来る人は来るけど来ない人は来ない。それを何とかしないといけないので、一番いいのは、放課後子ども教室の中でバウチャーを含めて奨励していかないといけない。来る子は楽しくて来るけども、来ない人はテレビと漫画を見ていることも。コミュニティスクールと地域本部と放課後子ども教室、その予算の出どころは違うと思いますが。

定野教育長

放課後子ども教室はこれからも強化をしていきたいと思ひますし、何か興味が湧くこと、色々な体験をやらせるということはとてもいいことです。

コミュニティスクールは、開かれた学校づくり協議会が全校にあり、その機能は既に果たしています。開かれた学校づくり協議会が、例えば土曜に行事を行うこともやっています。大人も多く集まるので、それについては先進的にやっていると思ひます。

ただ、足立区ではコミュニティスクールとして10校指定していますが、開かれた学校づくり協議会とどう違うかが曖昧です。今、積極的に打ち出さずに、開かれた学校づくり協議会があるので、まずはそこでやっいてこうと思ひています。

村上青少年教育担当係長

どうしてもそれぞれがタコつぼに入ってしまひ、放課後子ども教室も公社の生き残り策としてやろうとするこもある。そこで1つのタコつぼになってしまひ、元は青少年課で始めたが全く入る余地もない。

開かれた学校づくり協議会も、地域の中に入っている方と入っていない方もいます。

明石議長

足立区の青年会議所は、行政と連携はありますか。

村上青少年教育担当係長

昔は一緒に何かやりましようということがありましたが、最近はその動きができていないと思ひます。

明石議長

25年ほど前に、その青年会議所が「学校どんなとこ運動」を起こしました。子どもを全部奥さんに任せるので、学校がどんなところか知らない。学校はどんなところか知るのに。一番手っ取り早いのがPTA会長に立候補する。20数年前、意外とPTA会長の方は青年会議所の方が多ひです。その後PTAがものすごく変わる。色々なイベントが好きだから

活性化するというのがありました。それで、少し元気がある青年会議所と組んでみると体験を起こせるかなというのが1点ある。もしそれができなければ、スポーツや教育を含んだNPOをお願いします。

やはり行政は皆さんが出る場を設定するのが良い。舞台設定は行政が行い、上演してくれるのは皆さんですという形に。そのためには、基礎の青少年団体も大事ですが、子ども会等も含めて行う。そういう新しい動きを奨励するのはどうか。

定野教育長

地域スポーツクラブの一部は法人化している。

定野教育長

世田谷と比べると数も少ないし、質も違います。福祉系のNPOは結構集まっていますが、それ以外のNPOはなかなか集まっていないので、梅田にNPO支援センターを10年程前につくりました。そういう仕組みもつくり、講座等を色々やりますけど、そこからこういうのをつくってみませんかというサポートまでやってあげても、なかなか実際に動き出すまで至らないものが多いです。

村上青少年教育担当係長

そうですね。法人格を持っているところはもっと少ない。任意団体としてやっているところはありますよね。

定野教育長

福祉系は事業計画も立てやすいしお客さんも結構います。こっちはお客さん流動的ですのでそこは問題です。

明石議長

そういう意味で、行政がNPOのリーダーを育成する。

定野教育長

育成講座もやりました。色々な講座を行うと、終わった後、これは勉強したので、そのまま組織などをつくったらどうか、まで実践しています。

村上青少年教育担当係長

子どもに係る指導者の方々にNPO法人を1つつくり、5年ぐらい続いています。相談に行ったときにまず言われたのは、活動資金の目処が立たないとすぐ終わります。

例えば毎年100万円の予算活動資金をどう確保するか。今、ギャラクシティの事業や青少年課の事業等、色々な事業を受託して子どもたちのための事業を行っていますので、かなり安定してきています。

明石議長

大きな課題は、地域の青少年団体をどうやって育て、維持していくか、これはやっておかないと。

村上青少年教育担当係長

今までは、例えば子ども会が大事でジュニアリーダーを育てましょう、頑張ってください、その代わりに補助金を出します、で終わっていました。具体的には今、明石先生からお話が出たような地域の商店街と結びついて、何か体験活動をやるなどの呼び水を向けると、もっと動ける人はいると思います。しかし、皆さんどうしていいかわからないまま何となくついていってしまっている。そこも含めて具体的に体験活動を推進する上で、基礎の団体が取り組みやすい環境づくりも必要と考えています。

定野教育長

先生の話を経験した団体にして、おもしろい、と言ったところでエリアを決めて1カ所試してみる。うまくいけば、条例化するという方法がとれるかもしれません。

伊藤子ども家庭部長

特色のあるところ、商店街にある地区についてはそういった子どもの商売体験ができるし、住宅街ならばそれも届かないこともあります。

明石議長

東京都の八王子、その子ども会が土曜日に市場を開きます。そこにワンコーナーを設けて、農家から仕入れたキュウリやトマトを売ったもうけを貯金して活動費にする。土曜日とか朝市があります。子ども会が、農家と交渉して新鮮なものも売ることができますし、シャッター商店街や土曜の朝市など、農村地域であればそこで試してみる。

定野教育長

足立区はそれほど野菜つくっていないので難しいですが、例えば住宅街、団地ならば、買い物を手伝ってくれるボランティアなどの発想も大事です。物を売るのでなく買いに行くということです。

明石議長

千葉市でやりました。40年前につくった団地で若い人がおじいちゃん、おばあちゃんにおやつをつくってあげる取組みです。公民館で講座を設け、小学5、6年生がおやつを研究します。おじいちゃん、おばあちゃんの好きなものを調査して、つくって、宅配します。ひとりぼっちのおじいちゃん、おばあちゃんをどうするか、というのも1つプランに入れても良いと思います。

成田副議長

日体大の場合には、最寄りの駅は田園都市線の桜新町です。日体大の学生が、年に数回、桜新町の商店街と日体大に行くまでの道路を清掃する。それに地域の中学生、いわゆる今日の課題である青少年団体組織の活性化、それに桜新町近在の子どもたちが一緒に協力してやります。

足立区の東京藝術大学、帝京科学大学などは、そのような試みはやっていますか。

定野教育長

学生を巻き込んでというのはないですが、ごみゼロデーとか、地域主体でやっているところはあります。

成田副議長

大学独自でやっているのですか。

伊藤子ども家庭部長

未来大が若干やっています。

定野教育長

地域を巻き込んだ清掃活動は、去年は延べ8万人ぐらいだったと思います。ビューティフル・パートナーというバッジや帽子を配ったりして、地域も喜んでやります。

明石議長

そういう成功事例があるなら、もっとそれを推進するのが良いと思います。

寺島青少年課長

各地区委員会では、クリーン作戦を行っていますので、そこと大学が連携してできるかということと思います。

明石議長

8万人の中に参加しない貧困層がどうしたら参加できるかを考えてく必要があると思います。大きなイベントがある中で、関心はあると思います。敷居が高いのかもしれない。その辺を学校と保育所がタイアップしてそこからの掘り起こしも良いと思います。

定野教育長

今の問題は、そこに参加する人はいつも同じというところです。

明石議長

是非それを青少年課で考えましょう。クリーン作戦があれば、どうしたら37%（就学援助率）の家庭のお子さんが参加していただけるのか。

定野教育長

親と一緒に言わない限り、なかなか行けないと思います。親の理解を進めていく必要があります。

伊藤子ども家庭部長

電機大学の一部を借りて、年1回打ち水をやります。そばに足立学園があり、潤徳高校や保育園も来て、地域の商店街の皆さんも一斉に水まきをやるという、そういう事業はあります。

明石議長

日本の伝統的な江戸時代から始まった良さもいいですね。

定野教育長

人の家の門掃きもやることは、日本の古きよき伝統です。

伊藤子ども家庭部長

商店街で門掃き協力店、というステッカーが張られていることもあります。

明石議長

そういうのを若い人で探して掘り起こしてもらおう。そこでディスカッションしてつなげば、成田先生おっしゃったように線にすればいいと思います。打ち水は非常にわかりやすい。上から目線ではなく、打ち水は下から目線だからわかりやすい。

クリーン作戦や打ち水を含めて、足立バージョンでストーリーをつくっていけばいいと思います。足立の給食はすごいから、そこを何とか食育に絡めておやつを出すなどをすればどうか。

定野教育長

体験という1つの切り口は、本日出していただいたので、それを踏まえて一応見直してみる必要があります。

伊藤子ども家庭部長

教育大綱の中に社会教育委員の先生方の意見を盛り込むかどうか調整していますか。

寺島青少年課長

まだですが、社会教育委員の先生方のご意見を伺いたいと、関係所管では申しております。したがって、教育大綱に関する意見交換の場ができたらいと考えています。

伊藤子ども家庭部長

地域と家庭、教育も入るということで、明石委員がおっしゃった第三の大人と出会う、

その仕組みづくりをするようなご提案ができればいいですね。

定野教育長

体験をブレークダウンして、第三の大人と会う。

明石議長

そこで私が第三の大人と提案しています。言葉でいうと「世間をつくる」ことです。世間体が悪い、などと申しますが、今の小・中学生は「世間」がありません。あるのは学校と家庭しかないような。第三の大人と出会うのは「世間」です。世間体が悪いから早く帰ってこい、と昔言われました。今は世間体がないから、そのようなしつけができない。

成田副議長

地域組織の活性化があります。日体大の例で、女子サッカーのW杯中、なでしこJAPANを観戦できるように朝ずっと開放していました。朝6時から日体大は、教室を開放して、壁いっぱいのスクリーンを用意しました。地域の方を朝6時から入れて、日体大のチアガールや応援団と一緒にステージに立ってなでしこの応援をしました。帝京科学大学や東京藝術大学などでも、それぞれの特色を生かしながら、地域の方々、子どもたちも呼び込んで盛り上げていくのも良いと思います。

伊藤子ども家庭部長

先日は、帝京科学大学との連携事業で協力していただきました。また、小学生対象の夢の体験教室も行いました。そこに参加する子どもたちは、アッパークラスです。

伊藤子ども家庭部長

大学は敷居が高いので土曜日に勉強しに来る子どもたちは、おとなしくて積極的な子たちが多いですね。

村上青少年教育担当係長

ギャラクシティもそうですが、来ない子をどうするか考えたとき、学校でやるしかないという話になってしまう。そうすると学校の先生のやることが次々と増える。そうではない別の仕掛けをどうつくるのかを、いつも非常に悩ましいと思っています。

例えば学校の中にもっと地域の人が入り込めればいいのですが、それも難しい。どのように参加しない層に働きかけるか、そこは学校以外のチャンネルをどうつくるかだと思います。

明石議長

退職教員や退職校長会があると思います。千葉市は、そこでNPOをつくってもらいました。それで色々なことを請け負い、学校に入ってサポートするとか、公民館で勉強を教えるとか。そこは市の補助金を出していますが、退職された先生方というのはやはり力がある。そういう退職校長や教員の組織が足立区にあれば、そことタイアップしてNPOを

つくってもら、任意団体では補助金だって出しにくい。それで学習体験や生活体験、自然体験のときもキャンプリーダーの方もいるかもしれない。

成田副議長

それは千葉市だからできるかもしれないが、足立区ももちろん退職される校長先生、副校長先生も大勢いらっしゃいますが、足立区で退職した校長先生が組織を持っていますか。

村上青少年教育担当係長

区はないです。

成田副議長

まずないと思いますが調べてみてください。

寺島青少年課長

任命権者は東京都です。

明石議長

いや、千葉市の任命権者は千葉県ですが、各市町村で持っていますよ。

寺島青少年課長

市教委で持っているのでしょうか。

明石議長

例えば少し学習が遅れているお子さんがいると、それを引っ張り出してきてしっかり教えて学校に戻す。それを教えるのを退職校長先生というような制度もつくっています。

寺島青少年課長

足立区でも学校現場に入っています。

明石議長

それを団体として行うのもいい。勉強というか学習は増えているけども、自然体験、生活体験とかそういう形もやるといいですね。

村上青少年教育担当係長

学校教育の範囲外の部分もできるような、学校出身者なので学校に入りやすいことだと思います。

今まで私どもで子どもに係る色々な活動している方々とギャラクシティでイベントを組んで、色々な子どもたちに体験をしてもらいますが、今年からまたリニューアル前に戻っ

て、西新井アリオショッピングモールで事業をやるようにしました。

何が違うかという、ギャラクシティに連れてこられない子どもたちが、買い物には連れてきてもらっているのだから色々な体験ができる。そこは少し大事かなと思い、ボランティアの方々の活動の1つとして始めましたが、来そうなどころに行くというのも大事と。公共施設は行かないけどショッピングモールは行く、そこも出前出張をどうするかを考えるべきと思っています。

寺島青少年課長

来てくれない子どもに、いかに届けるかというところだと思います。

明石議長

もう1つ調べていただきたいのは、学校栄養士さんを含めて一般の栄養士さんがいます。退職後の栄養士で組織する協会などです。次は、病院の看護師さんの看護協会がありますから、もし足立区でそのような職能集団があるかどうか。ボランティア教師とか栄養士とか看護師さんは社会貢献してきました。そういう方たちの支援、地域の青少年団体も大事ですが、新たな職能団体にもお願いできないか。足立には、父親の会、おやじの会がありますか。

村上青少年教育担当係長

おやじの会があります。きちっと取りまとめるということがなくて、私が10年近く前に調べたときには、全学校の半分ぐらいという状態でした。最近の状況は把握しておりません。一時期たくさんできましたが、減少傾向と思います。

明石議長

シングルマザーも多いと思いますが、シングルファーザーも多い。おやじの会がシングルファーザーを支援するとか、てこ入れしやすい。子どもが来るためには、まず親たちが気分的に安心しないと。体験してこいなんて言えないので。

村上青少年教育担当係長

P T Aはお母さんが中心になっているので、O Bのおやじの会の男性ができない部分をサポートする、というような取り組みが多かったのですが、もう少し活動が広がるということは大事です。

明石議長

私は10年間シングルマザーの親子のキャンプをボランティアでやってきました。助成団体があり、そこの支援をいただきながらシングルマザーと親子の1泊2日のキャンプです。そこで、フランス料理のシェフに来てもらい、簡便な料理をキャンプ場でつくってもらいます。私の狙いは一ヶ月に1回でいいから、こういう簡便なフランス料理ありますから親子でつくってくださいとお伝えしたい。

それで、昼間は遊んで、ご飯をつくり、夜はお母さん同士で私たちとお酒を飲みながら育児相談をする。子どもと学生は別で寝ます。お母さんはほっとする。そういうのを九州から北海等まで10年やってきました。

親子への1泊2日の食事、そこでわかったことは、お母さん方が一番欲しいのは、正規の仕事が欲しい。そのためには奨学金があるか、夜どんな学校に通えばいいか、どんな資格を取りたいか、これが1つ。2つ目は、いい弁護士を紹介してほしい。離婚後は半年間養育費送ってくれるが、半年後は送ってくれない。それをみんな相談しています。いい弁護士知りませんか。その2つです。

伊藤子ども家庭部長

母子家庭、父子家庭の方々も、親子一緒に外へ出る機会をできるだけ多くつくってあげることが大切だと思います。

明石議長

それを貧困対策として足立区がサポートする。そういう明るく楽しい話題があれば、私たちもちょっと頑張ってみようか、と思うようになるのでは。

伊藤子ども家庭部長

子どもを親から離してお母さんたちを自由にする、というようなことですね。

明石議長

そうです。学生ボランティアには男性がいる。男子は、子ども達に特に人気者です。

明石議長

どう見てもだらしのない大学生にもみんな来る、お兄ちゃんって。そういう形で、足立区で、私も是非その貧困対策として、母子家庭、父子家庭を支援する事業をやっていただきたいです。

村上青少年教育担当係長

是非、提案してみたいです。

伊藤子ども家庭部長

そんなにお金のかかる話ではないと思います。バスをチャーターして、鋸南や日光の区の施設に泊まっていただく。

明石議長

その際、大学生のボランティアと一緒に遊び活動を共にすれば、お母さんは開放されてほっとします。大学生と子どもたちが、寝起きも一緒にすればいいと思います。

伊藤子ども家庭部長

大学の中には幼児部門の大学もあります。帝京科学大学もあります。

明石議長

子どもの大学もある。

村上青少年教育担当係長

東京未来大学が綾瀬に専門学校「みらい園」といって、発達障がいの子どもたちの施設をつくり、子どもを見ている間に親が一息つける場所でもあり、大学の心理学の先生がカウンセラーとして常駐して親の相談にも乗っています。

子どもを預け、安心して悩みの相談をしたり、ちょっと一息、そんな場になっていて、先生のお話を伺い、母子家庭、父子家庭の方々は、特にこのような場が必要ということを感じました。

明石議長

フランス料理のシェフの集まりでNPOをつくっています。彼らもボランティア精神があります。彼らに聞いたら、一流ホテルに在籍しているときは施設がある。腕をふるえませんが、退職したら腕がうずうずしている。それでこの間、キャンプ場でつくれる簡便なレシピを書いてほしいと頼みました。それだったら親もつくれます。

成田副議長

今回5回目ですが、過去4回と比べて非常に建設的な展開になったと思います。

明石議長

皆さんと問題意識も共有できました。今後も今回のように展開していきましょう。次回は家庭の問題。非常に難しいと思いますが検討しましょう。家庭の教育力低下、どうすれば元気になるか。

村上青少年教育担当係長

今日の最後の議論は、正にそこに関わってくる話題だと思います。

明石議長

以上をもちまして、第5回社会教育委員会議事を終わります。ありがとうございました。

午後3時38分・会議閉会